

「ええ、おります。どうぞ上つて下さいな。そこは寒いから…」

露は奥の間の炬燵で手紙を書いていた信次はそのことを告げた。

「何や、おるといふたんか。勝手に返事せんようにといふも言うとするだろうが…」

軽い舌打ちをした信次は、それでも目の前の硯箱や筆をかたづけ始めた。

小作の者が一人で、それもこの夕ぐれどき、折り入ったのみごとがあると訪ねてきたのだ。よほどのことと、露は察した。

炬燵の間を通った修造は、いくらすすめても襖ぎわから中へはいろいろとせず、座布団も当

たが、両手を畳の上につき、その両腕の中へ落としこんだように深々と頭を下げて、じつとしままであった。

信次は、指にはさんだ煙草を神経質そうに灰皿で消し、消したかと思ふとまた箱から新しいのを抜いて火をつける、という動作をくり返していた。

何かが気に入らないときに見せる信次のくせである。

「そんなにまでして上の学校へ上げんといかんのか。金がないならしないで、息子にちゃんと納得させるのが父親だろうが。」

「へえ。そうも思うたんでござんすが……。何せ、

てずに畳の上へ坐つたままであった。

「それで？ わしにたのみごととは何や。いったい……」

信次は修造の顔も見ずに、煙草に火をつけながら、要件をせかした。

「へえ……。実は……」

修造は言葉を切った。言い淀んでいる風であった。

露は台所へ立つた。

みかんの籠と、吸須と湯呑をのせた丸盆とを両手に持ち、露が再び炬燵の間に戻ると、二人の様子は、先程と大分異った感じになっていた。

修造は相変らず襖ぎわに坐つたままであつ

あれは学校のできがええもんで……。

先生も、中学校へやらんのは惜しい、というてくれとります。本人も、うちに金のないのはわかつとる。けど、父ちゃんがやってくれるなら、おれは行きたい。いつか必ずその恩は返す、とこう言うてくれまして……

うつむいたまま、くぐもつた声で訥々と言いながら、修造は懐から汚れた手拭いを出すと、鼻の下をこすつた。

そして、意を決したように今度ははっきりと顔を上げ、

「十円だけ……。何とか、旦那さん。貸して頂くわけにはいかんもんですかいのう」

と、信次の横顔に向かつて、一語一語を切るようにきつぱりとした口調でいった。

「そりやあな。うちにそれだけの金がないとはいわんぞ。けどな。お前そうやって借りて、返すあてがあるのか。ないやろ。」

息子の出世払いやなんて、わしにはそんな気の長い話は通用せんぞ。」

「そんなことは思うとりませんで…。」

借りたお金は、家族で相談してどんなことをしてもお返ししますけん。

とりあえず、今さしあたって必要なだけ、用立てて頂けたらどんなに嬉しいか…。」

旦那さんよりほかに頼るところがないもんで…。」

い！

「おなごは黙っとれ！」

信次は露を一喝すると、

「悪いがのう。お前の期待には添えん。ほかの金策を考えてくれ。」

断定的な言葉を修造に向かつて吐いた。

さらにながつくりと首を沈めた修造は、もう何も言わなかった。

障子を開けて廊下へ出ていく信次を見送りながら、露は暗澹たる思いをかみしめていた。

部屋の内、夜の色が忍びこみ、寒さがつのってきた。

修造の膝頭が、がくがく小刻みに震えている

子のためなら、と恥を忍んでまいった親心を察しておくれなさんせ。」

突然、信次のこめかみがびくりと動いた。

聞いていた露は、あつと思つた。

修造が、今何げなく使つた言葉が、信次の心を逆撫でしたことを感じた。

案の定、

「親か。親心か。わしは、あいにく親ではないんでのう。親心なんかはようわからん。」

言うなり信次は立ち上がった。

「あんた！」

露は思わず声を上げた。

「もつと修造さんの話を聞いてあげて下さい」

のが見てとれた。

「修造さん、今日のところは一応引きとつて…。」

主人にはもう一度わたしから頼んでみるから…。」

…。」

「いや、もうええです。甘い考えのわしが悪かつたんですわ。何とか家族でもう一度考え直してみます…。」

修造はそう言つて顔を上げた。

部屋中をいろいろとつた薄墨色の暮色の中で、修造の表情は十分に読みとれなかったが、その

声音には、隠しようのない絶望と哀しみがこめられていた。

電灯がつき、電車が走る世の中になっても、まだ貧しさから逃れられない人々が巷には満ちていた。

特に小作農家の場合は、働いても働いても、貧乏が首枷のようにじわじわと締めつけた。

大正末期から昭和初期の香川県では、全農家のうち、小作農家が八割を越えるという状況で、農民たちの汗の結晶である米や麦は、穫れ高の五割程度も年貢米として地主に納めねばならなかった。

一反歩当り六俵の収穫を平均として、五反歩の小作ならば、その取り分は十五俵。金額にしてわずか二百四十円程度。中学卒の男子

農家にとっては猫の手も借りたい多忙な毎日である。それを目前に見ながら、手を拱いて暮さねばならないことが、どうにも苦痛でたまらなかつたのである。

許されるなら、働く人たちといっしょに汗にまみれたかった。身体を使うことが少しも苦にならない露には、その方がどんなに楽か知れなかつた。

「小作の人たち、気の毒や……。えらい思いばかりして…」

ふと洩らした言葉を聞きとがめた信次から、露はこつぴどく叱りとばされたことがあった。

「小作たちは、地主が土地を貸してやつとるから

事務員の日給が平均一円、月三十円ぐらいの時代に、年間たったこれだけの現金収入で、大ぜいの子供を育てている、というのが小作たちの実状であつた。

大正十三年、香川郡太田村伏石で起つた事件はこうした中での小作争議であつたが、刑事事件となり、しかも、弁護士が自殺するなど、全国的にも多くの人々の耳目を集めたできごととなつた。

露は長山家へ嫁いできて以来、こうした有様を見聞きするにつけ、小作制度というものに漠然とした疑問を抱き続けていた。

露は春と秋の農繁期が嫌いであつた。

食うていける。みんな、ありがたく思つて働いてるんじや。

「お前がいらんことを心配せんでええ。少しは立場をわきまえろ。」

「抗弁などはさむ余地のない激しい口調であつた。」

出口を失つた露の疑問は、それ以来胸の中でずつとくすぶり続けている。

「たまたま金持ちの家に生まれた人間と、逆に、たまたま貧しい家に生まれた人間というだけのことであるのに、これ程までの差別があつていいのだろうか。人間どうし、どこに変わりがあるというのだろうか。」

むつかしいことは露にはわからない。だが、他人に働かせて自分たちは楽をし、その働く側の人々たちを、身分的に低いものと見ることは、どこかがまちがっていると思えてしかたがなかったのである。

女学校では、『天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず』という福沢諭吉の言葉の意味を教わった。人間はみな平等なんだと、素直にうなずかされた。

しかし、現実はそのばかりではないようだ。二十歳を過ぎたばかりの露などには、測り知ることのできない矛盾がこの世には存在しているようであった。

修造が訪れた夜、露はいつもの夜なべの針仕事を手につかなかった。

折れたように首を落しこんだ修造の姿や、苦悶に満ちた声音が何度もよみ返った。

『何とか家族で考えてみます…』と修造は言った。だが、それができるくらいならはじめから信次の所へはこなかったはずだ。

(子供を進学させるために必要な金…)

露は、母一人娘一人の境遇で、自分を女学校へ入れるため、母のフミがどれだけ金策に走りまわったか、を思い起こした。

(以上2月10日放送分)